全国美術館会議機関誌

全美フォーラム

ZENBI FORUM

全国美術館会議機関誌

全美フォーラム

ZENBI FORUM

01 F-02
市民の「心の避難所」として
—地震から半年—
熊本市現代美術館　岩崎千夏

02 F-05
春画公開に関する私的回顧
—福岡市美術館「肉筆浮世絵の世界」
福岡市美術館　中山喜一朗

03 F-08
専門職の連帯と情報公開
—国際博物館会議ミラノ大会 2016　参加記
東京都美術館　稲庭彩和子

特別寄稿　F-12

全美の昔
山梨俊夫
国立国際美術館・全国美術館会議副会長

実物の感動を
より豊かな感動体験へ

多言語対応・合成音声・ビーコン対応
多機能なのに、自分たちで更新・運営ができる
音声ガイドアプリ、新登場です。

musenavi
音声ガイドアプリ　ミューズナビ

ミューズナビ

最新導入実績：2016年10月 鳥取砂丘 砂の美術館様 「スナビ・ナビ」
その他の実績はウェブサイトにてご確認ください

岡山：岡山県倉敷市阿知 1-7-2　tel 086-426-5932
東京：東京都新宿区西新宿 4-3-12　tel 03-5302-2040
大阪：大阪府大阪市都島区片町 2-2-40　tel 06-6242-8090

ミューズナビ
http://www.musenavi.jp/
info@pscsrv.co.jp

PEOPLE SOFTWARE
私たちは感動価値創出企業を目指します
ピープルソフトウェア(株)

お問い合わせ・資料請求はお気軽に　0120-96-0228（通話料金無料）
携帯電話からは 086-426-5932（通話料金がかかります）受付時間 9:00～18:00（平日）

掲載されている会社名・商品名・サービス名は各社の商標または登録商標です。記載の製品仕様は、予告なく変更する場合がございますのであらかじめご了承ください。

01

市民の「心の避難所」として

―地震から半年―

岩崎千夏 *Chika Iwasaki*（熊本市現代美術館）

4月14日、16日の熊本地震からあっという間に半年が過ぎた。この間、余震は4千回を超えたという。地震後閉館していた熊本市現代美術館は、ホームギャラリーや子育てひろばなど、館の半分を占める無料スペースを5月11日に開館。開催中だった展覧会は規模を縮小して5月18日に無料で再開、6月25日には夏の企画展に「かがやけ、くまもとの笑顔たち」とサブタイトルをつけて全館を開館した。

実は当初私は、美術館を美術館として開館することに懐疑的だった。

地震直後、ライフラインが寸断され、物流も止まり、人間として最低限度の生活も確保できない状況で、市民の生活や安全を確保するために行政職員や自治会等の皆さんが奮闘する中、誰の役にも立てないもどかしさと絶望感は今も忘れることができない。美術館を再開することに意味があるのか、文化施設やアートに何ができるのか、大変な状況の皆さんに嫌な想いをさせるだけではないか…そんなことばかり考えていた。

しかし、地震から10日ほど経った頃、まだライフラインも復旧していない状況の中、美術館の再開について問合せが急増、背中を押されるようにして開館を決意した。館内の工事や点検を進めると同時に、どのようなスタンスで開館するのか、スタッフ全員で協議。自分たちも被災し、避難所や車中泊の者、自宅に入れず遠方の実家から通う者、自宅から通うスタッフも半壊、液状化と全員無傷なわけではない。しかし、だからこそ、市民はどんな場所・空間・時間・体験を必要としているのか、本当に親身になって考えてくれた。

被害状況（書庫）

ホッとする場がほしいのではないか、来てみたら何かがあって、気が向いたら参加できるくらいが良いのでは、頭を使わずできることがあるといいのではないか、子ども達の行き場がない、親もきっと辛いと思う…。余震も続く中、館内を片付け、水漏れの跡を掃除し、バラバラになったマンガや書籍を整え、大人や子ども向けの上映会、ぬり絵や折り紙の準備、子育てひろばの整頓などを少しずつ進めて開館。当日は全員が朝からそわそわする中、開館前から並んで下さる来館者が。中にはベビーカーを押すお母さんの姿も見えて、開けてよかった…と、胸がいっぱいになった。

初日から200名を超えた来館者は、「だまし絵」展を再開すると倍増。土日の来館者は千人を超えるようになる。アンケートには「地震で疲れている心を癒せた」「地震の片付けに終始する毎日の息抜きになった」「非日常感が味わえて、心が安まった」「開けてくれてありがとう」と多くのメッセージをいただき、こちらが励まされた。

開館してしばらくすると、一緒に事業をしたいという相談が次々と舞い込み始めた。ホール関係の復旧の目処が立たない中、当館は彼らの受け皿でもあった。しかし連携事業も地震を無かったことにはできない。被災した皆さんはどう感じるか、独りよがりになっていないか、押しつけにならないか、もちろん安全面も今まで以上に慎重に配慮する。今の市民の気持ちに添わないとお断りしたものも多い。その中で実現した連携事業は、県立劇場と実施したワークショップやコンサート、市立博物館とのプラネタリウム、商店街とのコンサートや演劇やアートプロジェクト等、今日までに20を越え、多くの市民が参加して下さっている。

熊本の地震後、イタリアや韓国、茨城、函館、そして10月には鳥取で熊本地震とよく似た地震が発生し、余震が続いている。心がざわつき、何もできない自分にまた胸が痛む。これから

開館初日（子育てひろば）

も何処かで地震が起き、被災する街があるのは避けられないことだろう。その際にできるだけ被害の少ない震災に強い街を作ること、できるだけ早くライフラインや住環境を整え市民の生活を支えること、経済を建て直し街の元気を取り戻すこと、やらなければならないことはたくさんある。熊本県や市町村もそれぞれに復興計画を策定している。

しかし同時に震災では全ての人が被災者である。心のダメージは被害の規模とは関係なく、誰もが傷ついていることを今回の地震で強く感じた。そのような中で、緊張から一時でも開放される空間と時間、謂わば「心の避難所」を無意識に多くの市民が必要としているのではないか。

文化施設もアートも、地震直後は何の役にも立てなかった。しかし緊張が続き、精神的な疲労も蓄積していく状況の中でこそ、いつでも立ち寄ってほっと一息つける場所として、いち早くすべての市民に対して開いていたい。そして、ここでの体験によって前を向くきっかけを得たり、リフレッシュしたりして、また日常と向き合う力を得てほしい。心からそう感じた。

地震から半年、美術館の来館者は20万人を超えた。あの時、美術館を美術館として開けて良かったのだと、ようやく思えるようになった。市民の心に寄り添った「文化による人間力（生きる力）の復興」は、被災地における文化施設の使命であると今は思っている。

02

春画公開に関する私的回顧
―福岡市美術館「肉筆浮世絵の世界」

中山喜一朗 *Kichiro Nakayama*（福岡市美術館）

公開までの経緯

「肉筆浮世絵の世界―美人画、風俗画、そして春画―」（2015年8月8日～9月20日）は、公立美術館が本格的に春画を公開した最初の展覧会だった。本編の肉筆画が約170点、春画編は肉筆と版画を合わせ、本編の作品とほぼ同数を展示した。

企画段階から春画公開が前提だったわけではない。一昨年の夏から秋にかけてのこと、あまり知られていない肉筆浮世絵を系統的に紹介する内容を練っていくなかで、さらに知られていない春画の公開が課題になった。幸い、共催の西日本新聞社とテレビ西日本が「ウチは大丈夫」と言ってくれたので、公開に向けて動くことになったのである。展覧会の監修は石田泰弘氏（国際浮世絵学会理事）、担当は吉田暁子学芸員だった。春画の公開に関する諸々を、私が受け持つことになった。

福岡市長への説明資料作りが手始めだった。「春画は芸術である。大英博物館が春画展をやった。公開にはこんな配慮をする。市民とのQ&A」というような内容である。そうした中で吉田学芸員が「でも春画はポルノという側面もありますよね」と言った。その通りである。しかし私は勢いで「春画はポルノではない」と答えた。まさか市の上層部向け資料に、春画はポルノです、とは書けない。それに、男性目線で作られ男性の性的興奮を目的としたものをポルノだとすれば、春画はそこから逸脱している部分がか

なりあると思っていた。それにしても「あんなもので興奮する男なんかいない」みたいな発言は、我ながら幼稚だった。

所轄の警察署は肩すかしだった。乗り込んで熱弁をふるうはずが、「そういう配慮をされるなら、こちらから言うことはありません」と、わずか数分の電話で終わってしまった。市の上層部との協議はさらに予想外だった。最終的に高島宗一郎市長と面談したのだが、「春画はクールジャパンのコンテンツ」とまで言われ、市長の先見性に感服した。つまり我々は、大方の予想に反して、さしたる苦労なしに公開にこぎつけたのである。

作品の借用先が重なることもあって、永青文庫で開催される春画展の話も聞いていた。開催の年を迎えた翌年1月に、永青文庫の竹内順一館長（当時）と会って情報を共有した。詳しく述べないが、東京では数々の障害が立ちふさがった。警察の対応ひとつとっても、大量の春画を先立って公開している当館に、警視庁がわざわざ視察に来たほどだった。

公開と反響

公開に際しての配慮は、①会場内に別室を作り、入口で入場者をチェックする。②図録は2分冊とし、春画編の販売を制限する。③観覧料金を18歳以上と18歳未満に区別する。高校生でも18歳であれば観覧可とする。などである。

吉田学芸員のアイデアで、レディースナイトとメンズナイトを実施した。吉田学芸員と私がそれぞれのナイトでスペシャルなギャラリートークをしたのだが、監視員の性別まで徹底した。したがって、大盛況のため臨時に追加実施までしたレディースナイトの内容を、私は一切知らない。女性の参加者は2回合計で500人以上。吉田学芸員もメンズナイトの実体をまったく知らない。春画の内容を知る担当者が男女ともいたから実現した企画である。中身は言えないが、約110名の参加があったメンズナイトも大い

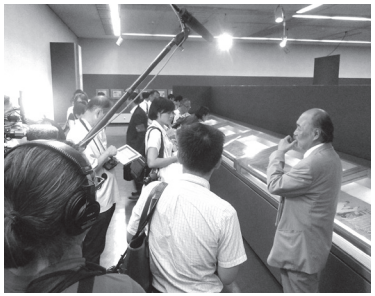
メンズナイトのギャラリートーク風景

に盛り上がった。いつもは男女混浴なのに、その夜は男湯になったわけだから、遠慮会釈のない場になるのは当然である。ただ、参加者数の大差は、ちょっと歯痒い。国際日本文化研究センター元教授早川聞多氏による春画の講演会も満員盛況だった。共催マスコミも踏み込んだ報道をしてくれた。春画展示室にTVカメラまで入った。私の顔の後ろに男女の性器が隠れてはいたが。

最終的な観覧者数は4万8千242人。当館の浮世絵関連の展覧会としては、まあまあの数字。中央紙の紙面にも取り上げられたが、爆発的な反響はなかった。このことを、私は密かに自慢している。福岡という街の文化成熟度は、どこにも負けないと思うのである。公開に対する各方面の理解、観覧者の層の広さ、同伴者のバリエーション、鑑賞態度、様々な反応。そこに感じるのは大人のセンスである。開催中の抗議は一件もなかったし、逆に、話題性に流されて見に来たという人も少なかったと思う。観覧者数は、正しい数字である。

この展覧会の意味は、オモテの作品と一緒に、質量が同等の春画を鑑賞できたことに尽きる。春画は、春画だけを見ても完全には理解できないと思う。その逆も真である。むしろ、春画と対峙させることによって、オモテの美人画に対する見方が私の中で大きく変わった。性の理想（オモテ）と現実（ウラ）。両者は互いを補完する。

学芸員なら誰もがわかっていることだが、性は文化において大きな位置を占めている。我々が秘匿してよい美術情報はない。我々は保守的になってはいけないし、不自由に甘んじてもいけない。また、地方だからと萎縮する必要もないのである。


春画展示室でのテレビ取材

03

専門職の連帯と情報公開
―「国際博物館会議ミラノ大会2016」参加記

稲庭彩和子 *Sawako Inaniwa*（東京都美術館）

国際博物館会議（ICOM―International Council of Museums）はミュージアムとミュージアムの専門職を代表する国際組織で、ユネスコと協力関係を保つ非政府機関だ。経済や社会問題全般に関して必要な議決や勧告等を行う国際連合経済社会理事会の諮問資格を有している。つまり、国際的な視野からではあるが日本の法令や文化行政にも影響する提言を行っている組織といえよう。今年で発足70周年を迎え、全世界138ヶ国に約3万6千700名の会員がいる。ICOMの元には専門分野に応じて組織されている国際委員会が30あり、美術館に関するところでは、例えば国際美術館会議（CIMAM―International Committee for Museums and Collections of Modern Art）があり、昨年は総会を東京の森美術館で開催したことが記憶に新しい。[1]

ICOMの大会は3年に一度開かれ、第24回は7月初旬にミラノにて開催された。筆者は東京都博物館協議会の助成を得てこの大会に参加してきた。ここでは大会の概略について報告しつつ、3年後に日本で初めて開催される京都大会に向けて、専門職の連帯と情報公開について述べたい。

ミラノ大会2016は世界約130の国と地域から約3500名が参加した大規模な大会であった。世界の会員約十人に一人が参加したという驚くべき参加率である。ICOMが発足して70周年の記念となる大会であり、また会員数が多いヨーロッパでの開催であったことも大きい。初の日本開催となる次回の京都大会に向けて日本からも百名近い会員が参加した。

「ICOM Milano 2016」メイン会場の MiCo 入口

7月4日から6日間にわたって行われた大会のメイン会場は、ミラノ国際会議場MiCo（Milano Congressi）。イタリアの建築家マリオ・ベリーニの設計によるヨーロッパ最大の規模を誇る会議場だ。ここの数千人を収容できる大ホールで開会式が行われ、続いて美術家のクリストをはじめとした5名による基調講演が連日行われた。また2日目からは分野別の国際委員会ごとに分かれ、プレゼンテーションやワークショップ等が続き、並行して今大会のテーマを探求するパネルディスカッション等が行われた。例えば大会3日目に行われた「The Social Role of Museums: New Migrations, New Challenges」と題されたパネルは、極めて今日的な社会課題を反映した内容であった。大会後半は、メイン会場から離れて近隣の美術館を会場とするオフサイト会議や、各委員会の関心や課題に応じて選定された近隣の都市や文化施設に赴くエクスカーション等も数多く用意されていた。

大会後日の情報として特筆すべきは、開催後間もなくインターネット上のユーチューブに数多くの動画が公開されたことだ。開会式のスピーチを始め、基調講演やパネルディスカッションなどが動画として記録され、それも英語以外の言語にはサブタイトルが付き、発表者が示した画像も合わせて編集され、数週間後には全世界で見ることができる状況は、おそらくこれまでの大会にはなかった。今回の大会のテーマ「Museums and Cultural Landscapes（博物館と文化的景観）」が内包する、博物館運営における課題とは何なのか、また、この大会テーマに基づくプレゼンテーションでは、具体的にどのような事例がどのような視点をもって語られたのか、など現在のミュージアムの国際的潮流を知るのに非常に役立つ視聴覚資料となっている。またICOM発足70周年を

クリストによる基調講演

記念して制作された「Where ICOM from: 70th Anniversary Documentary」と題された動画もわかりやすい。ICOMの働きを歴史的に振り返りつつ、今現在の活動や今後の役割について、貴重な過去の映像や役員などのインタビューを通して編集されている。デジタルでの情報公開はこれらの動画にとどまらず、大会で冊子として配布されたICOMの年報や各国際委員会のプログラム概要も、多くが公開され参照できるようになっている。

こうした積極的な情報公開には、私たちが日常的に接しているデジタルメディアや技術が使われており、一見、特筆すべきことではないと思うかもしれない。しかし、では日本のミュージアム関係者が集まる大会などで、専門的な発表がここまで公開されているかというと、事例はかなり限られているのではないだろうか。つまるところ、技術的に可能であっても、情報公開の必要性やその意義についての認識の高まりと、具体的な公開への合意形成がなければ、ICOMミラノ大会のような情報公開は難しい。

ではICOMがここまで情報公開を推し進めている理由とその背景とは何であろうか。一つは世界各国の会員が持ち寄った知的資源を、参加会員の間だけでなく、より多くの会員と、この分野に関心を持つ人々とがすばやく共有することで、大会開催の意義を最大化したいからであろう。また背景としては、公共的役割を担っているミュージアムが社会の中で意義のある活動をし続けていくには、ミュージアムの専門職だけで情報を抱え議論していると、想像力も人材も圧倒的に足りていない状況に陥るほど、社会は複雑化してきているという現実だ。専門的視野からの見解はできるだけ公開し、ミュージアム以外の専門家とも連帯し、多様な経験を持つ市民が議論に加われるよう情報を公開していく、というような情報公開の潮流が欧米の公共セクターの運営において常識になりつつある。異分野の専門家から一般の人々までが参加可能な「開かれた議論」が

「Where ICOM from 展」会場風景
（ICOM70 周年記念展示、MiCo 内）

生まれる情報を提供し、「ミュージアムの役割」の断続的な再定義を行い、ミュージアムを拠点とした実質的な文化価値の生成を、より多様な人々との対話の積み重ねから生み出そうとしているのである。

大会中、何度となく耳にし、印象に残った言葉は「engage」だ。「ミュージアムはどうやって人々の関心を喚起し、文化財や作品を介して人々のつながりを築いていくのか」というような文脈で頻繁に使われていた。3年後の京都大会の機会をとらえ、日本のミュージアムの専門職が国内的にも国際的にも、どのように連帯し情報を共有しミュージアムの社会での役割について喚起していくのか、どのように人々を「engage」していくのか。国内のICOM会員が他の先進諸国に比べて非常に少ない現状を考えると、ICOMの会員か会員でないかを超えて、まずは専門職同士が互いにミュージアムの社会的課題に関心を高めていくための会合などを、各分野で断続的にしていくことが求められているのだろう。その際には情報公開の意義や公開への合意形成についても意識する練習を忘れないようにしたい。3年後のICOM京都大会で、情報公開を世界の会員から求められた時には、ミラノ大会レベルの情報公開が実現できることを想定しながら。

1　CIMAMは現在はICOMの国際委員会としてではなく、独立した運営事務所を持ち、ICOM関係機関として活動している。

全美の昔

山梨俊夫（やまなし としお）
国立国際美術館・全国美術館会議副会長

確か一九七八年のこと。前年に開館した北海道立近代美術館が幹事館になって全国美術館会議の総会が札幌で開かれた。当時は神奈川県立近代美術館の土方定一館長が全美の会長を務めていたから、鎌倉の美術館に事務局があった。そんな訳で、鎌倉に職を得て一年余りしかたっていない筆者が、右も左も判らず、全美が何であるかも皆目見当のつかないまま、事務局員で駆り出された。

いまから四〇年近くも前のことになる。北海道行もいまほど便利ではなく、機会もめったにないから、北の街に行くのは楽しみであった。朧気な記憶をたどると、確か一日目に総会を行なったのだが、会場がどこであったか覚えがない。出席する館長は三〇人に満たなかったと思う。そのほかに館長の随伴者や事務局員など、総数は五〇人ほど。美術館自体がまだ、全国を見渡してもわずかだったし、国立美術館何するものぞ、という姿勢が全美には支配的だったから、国立は会員館にはなっていなかった。誘いもかけなかったのだろう。いまのように大きなホテルの広い会議場を借りた一大イヴェントではまったくない。

総会出席者のうち、筆者ほど緊張し神経を集中させていた者はいなかったと思う。録音用の機材は用意されていない。しかし、誰かが進行、発言を記録しなければならない。それが筆者に割り振られた役目であった。発言を片言隻語も聞き漏らさないよう片っ端から速記していく。ちなみに筆者には速記の技術も経験もあるはずがない。脇目も振らず、判読困難な殴り書きを必死に続ける。内容は難しいものでもなく、込み入ったこともない。それでも無事総会が終わると、緊張が解けほっとした。何年か後、土方会長を嘉門安雄氏が継いでブリヂストン美術館が事務局を引き受けていたとき、担当の貝塚健氏から鎌倉に電話がかかってきた。過去の総会の様子が判らない。何か記録が残っていませんか。そんな話だった。僕が記録した速記録があるはずだ、探してみよう、と電話を切った。机まわりを懸命に掻き回してみたが見つからない。速記したものの、清書した覚えはない。捜索は無駄に終わり、貝塚氏に詫びの電話を入れた。その後どうなったのだろうと、いまも気になる。

さて総会が終わり、夜は、札幌郊外の山中にある定山渓温泉で親睦会が開かれる。三〇人ほどの館長が和風旅館の大広間に集まり、酒肴を調えた膳を前にしてずらりと居並んでいる。館長同士は、顔見知りもいれば、一年に一度の久闊を叙する人もいる。酒を酌み交わし談笑が始まる。お座敷芸者もいなければ格別出し物もない。どうも盛り上がりに欠けるな、と思いつつ事務局員同士で静かに肴をつまんでいた。そのとき突然、土方会長からこちらに声がかかった。

「山梨君、何か歌い給え。」

えっ、と息を呑んだ。何人もの館長がこちらを見ている。

「そ、それは、ちょっと勘弁してください。」

「いいから歌い給え！」

土方館長は、美術館の世界では、怖い人だとの定評があった。美術館長、美術史家、批評家としての実績実力を目の当たりにして畏怖の念をもってそう思われていたし、職場を一緒にしていると、そのワンマンぶりは実際怖い。ここは覚悟を決めるしかない。

「わかりました！歌います！」

顔には出さないが、捨て鉢な気分に意を染めて、坐りなおした。カラオケなどない時代である。伴奏といえば手拍子くらいなものか。手拍子がそぐわない、筆者の生まれた街を舞台にした歌謡曲「港の見える丘」をアカペラで歌いだした。歌いだして、あっ、と思った。歌詞を一番しか知らない。これ幸い、と考えなおし、心臓の鼓動を聞きながらどうにか一番を歌い終わり、失礼しました、と頭を下げた。拍手がパラパラと聞こえる。余興にもならない、短い冷や汗の時間が過ぎ、ふうっ、と溜息を吐いて、また静かに事務局仲間と酒を飲んでいた。親睦会のその後は何も覚えていない。

翌日の朝、観光バスで札幌に戻る車中、副会長であった嘉門館長が声をかけてくれた。

「山梨君、ゆうべは大変だったね。」

笑みを含んだ慈愛に満ちた眼差しと優しい言葉がしみじみありがたかった。総会の様子と会議の中味については、記憶に厚く霧がかかっているが、定山渓の旅館の一齣と嘉門さんの言葉は、いまなお強烈に記憶に刻まれている。

全国美術館会議はもともと館長たちの親睦の場であった、という話を現在でも時折耳にする。当初は美術館の数も少なく、年一回の総会で論議される話題もあまりなかったのだろう。札幌での総会から二年ほどのち、土方会長が亡くなり、七〇年代後半から八〇年代にかけて続々と美術館が増え、課題も多岐に亘るようになってきた。阪神・淡路大震災、東日本大震災もあり、穏やかに親睦を図っていれば済む状況は、急速に変わった。

それでもなお、館長も含めた美術館職員が互いに情報や関心を通い合わせ、連携し親交することの大事さは変わらない。いまは総会のあと、情報交換会に百数十人が参加し、世代の幅も広い。有志は二次会に街に繰り出し、一部は夜遅くまでカラオケを楽しんでいる。カラオケは民主的である。鶴の一声で無理に歌わされることがない。マイクを回しそれぞれが歌いたい曲を歌う。歌詞も全部画面に映る。全美はいまも親睦の場でありながら、もう館長中心の場ではない。昔の様子の一端を、体験談を通してまだらな記憶をまだらなままに思い返して、「記録」してみた。これも余興にならない余興かもしれない。